第2部

基本構想

第1章

京丹波町がめざす将来目標

1 将来目標像

京丹波町がめざす将来目標像

人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち

丹波高原文化の郷（さと）●京丹波

京丹波町は丹波山地の高原地帯にあって穏やかな気候風土に恵まれ、京阪神地域との歴史的・文化的なつながりの中で、さまざまなまちの特色が育まれています。とりわけ、京阪神地域に対しての食の供給地としての役割は大きく、京都、ひいては日本の食文化の発展に寄与してきた農山村地帯としての歴史は、現在に引き継がれ、他には求めがたい京丹波町の生活文化や独自の魅力を形づくっています。こうしたまちの性格を振り返ってみると、まさに、環境共生や健康へと志向を強める現代社会のニーズにこたえるものであるといえます。

このようなことから将来目標像は、京丹波町の風土や文化を底支えしている「丹波高原」を強調して打ち出します。

「人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち　丹波高原文化の郷（さと）●京丹波」は、地域の独特の人情味や風情を守りながら、この地に暮らす人びとが誇りと生きがいを見つけ、その喜びを共に分かち合いながら、京丹波町に暮らすことの価値を高めるとともに、さまざまな交流から生まれる活力によって、新しい時代に向かって飛躍するまちをめざそうとするものです。

この新たな将来像の実現に向けて、その方向を示したのが、右の図です。

まちづくりの中心に人を位置づけ、人びとの生活の基礎となる交通や情報、健康・福祉、安心・安全等の基盤条件を整えることを大前提とし、安心で快適な環境の中で住民自治を育み、町民の間にエコライフやスローライフ等の要素の再発見と協働の精神で実践活動を進めていくことを基本とします。

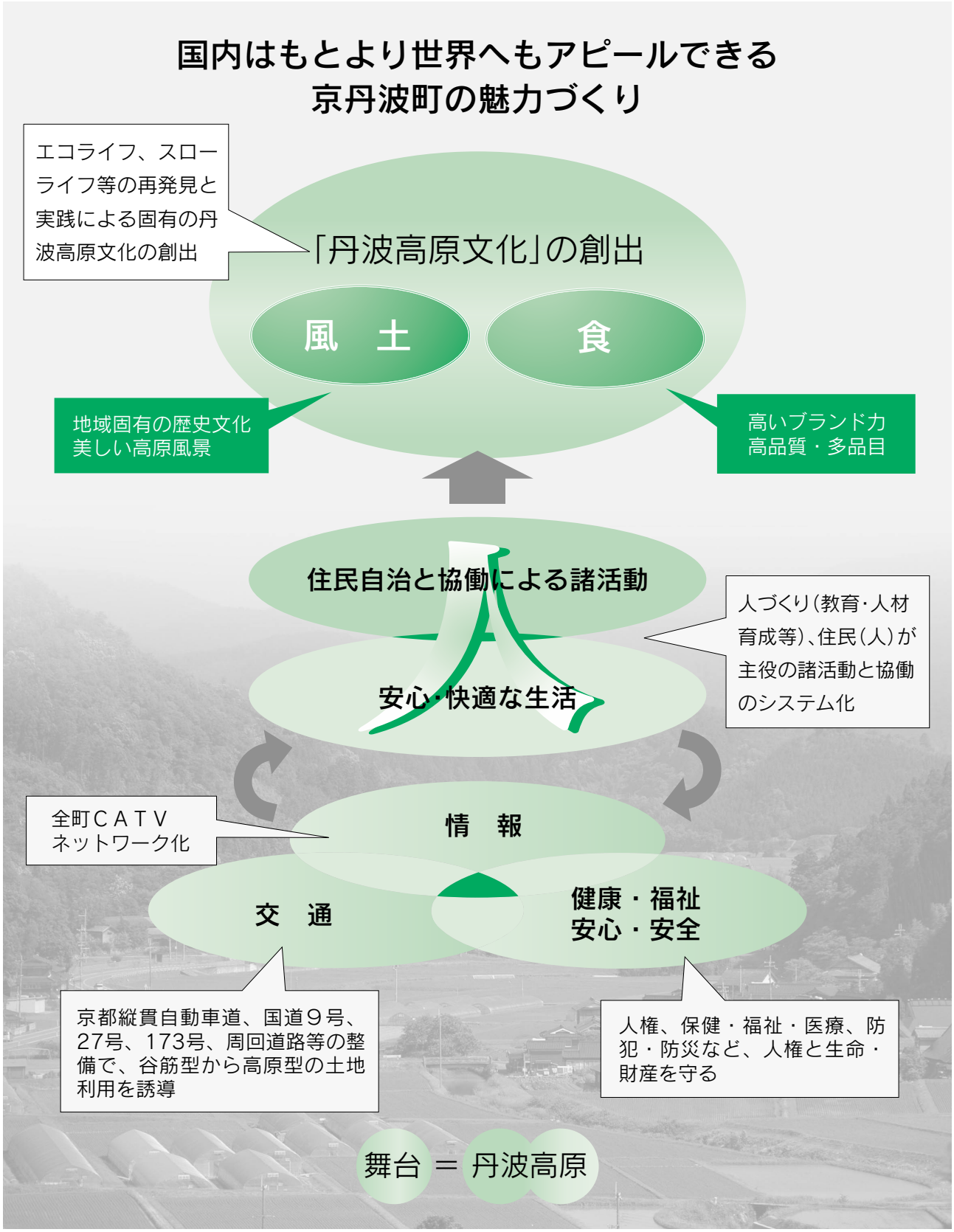
それらの実践活動の成果として、「風土」と「食」を基軸とした個性ある「丹波高原文化」の創出を図り、国内はもとより世界へもアピールできる京丹波町にしていこうとするものです。

「風土」は、美しい京丹波の高原風景をつくり出し、また、水と緑豊かな環境を創生・保全し、地域特有の個性ある魅力をつくっていこうというねらいを込めています。

「食」は、高いブランド力を持つ高品質・多品目の商品を企画開発し、多様な経路を通じて販売していくこと等により、京丹波町の経済的な基盤を強化していこうというねらいを込めています。

※エコライフ：環境に負荷をかけない、環境にやさしい生活をすること。
※スローライフ：生活様式に関する思想の一つで、人工的・効率的でスピード感のある生活ではなく、自然と調和しながらゆったりと心豊かに送る生活様式のこと。
※ブランド力：消費者に「このブランドだけは特別」と思い込ませる力。また、消費者の心をひきつけ、購買に至らせ、買い続けてもらう力のこと。

丹波高原文化の郷づくりの基本イメージ



2 将来人口フレーム

将来人口フレームは、近年の動向を踏まえるとともに、今後の将来目標像達成に向けた施策展開による効果を考慮して設定することとします。

京丹波町の人口（住民基本台帳及び外国人登録人口）は、平成18年10月31日現在で17,676人です。

また、国勢調査人口は、平成7年にはこれまでの減少傾向から増加に転じたものの再び減少し始め、平成12年で17,929人であったのが平成17年は16,893人となっています。

京丹波町の将来人口は、近年の動向がそのまま推移すると、ゆるやかな減少傾向を続けることが予測されます。

こうした中で、京丹波町では、畑川ダム等の新規水源の確保のほか、道路交通網の整備やＪＲ山陰本線の複線化による時間距離の短縮、産業振興による働く場の確保など今後の各種施策の展開により、定住のための基盤が一層整うこととなります。

また、団塊の世代をはじめ豊かな農村環境でのゆとりある暮らしを求める人びとが数多く存在する中で、これらの人びとがこれからの居住地として選択する条件も整っています。

したがって、まちづくりの進展による若者の流出の減少とともにＵＪＩターン者の増加を見込むとともに、一定の人口規模とバランスのとれた人口構成の確保による人的・経済的な地域活力の維持、向上をめざし、総合計画の目標年次である平成28年度の人口（定住人口）は18,000人を目標とし、さらに将来は、おおむね23,000人をめざします。

交流人口については、観光入込客数でみると、最近4～5年は約100万人前後で安定的に推移していますが、観光入込客以外にも、週末等に居住する半定住型の人口等も増加する傾向にあります。

したがって、将来目標像の達成に向けたまちづくりの展開により、交流人口は今後大きく増加していくことが期待できます。このため、交流人口は、目標年次の平成28年度は現状より30%増の130万人を目標とし、将来的には50%増の約150万人をめざします。

このようなことから、京丹波町の将来人口フレームを次のとおり設定します。

（単位：人）

	現　　況	目　　標 （平成28年度）	将　　来 （平成29年度以降）
総　人　口 （定住人口）	16,893	18,000	23,000
交　流　人　口	1,000,000	1,300,000	1,500,000

※ＵＪＩターン：Ｕターン・Ｊターン・Ｉターンの頭文字を取ってできた言葉。Ｕターンとは、都会へ出た後、出身地に戻ること。Ｊターンとは、都会に出た後、出身地の近隣地域に戻ること。Ｉターンとは、出身地にかかわらず、住みたい地域を選択し移り住むこと。

※定住人口：その地に居住する人の人口をいう。
※交流人口：通勤・通学、文化、スポーツ、買い物、観光などを目的として、その地を訪れる人口をいう。

3 地域構造

京丹波町の地域構造の特色

京丹波町の地域構造は、地形条件と古くから形成されてきた幹線道路や鉄道網、それらを基盤とした集落や市街地の発展等によって形づくられています。

その特色は、次のとおりです。

町 北部は山地が多くを占め、南部は起伏のゆるやかな高原地帯が広がっています。この中に幹線道路や鉄道が整備され、国道9号・27号と鉄道（ＪＲ山陰本線）が町の南東から北西へとほぼ平行して走り、また、国道173号がほぼ南北に走っています。

幹 線道路や鉄道の沿線を中心に集落や市街地が形成されており、その中でも国道9号（旧山陰街道）沿いに発達した須知・蒲生地区から桧山地区にかけては、京丹波町の中心的な地域となっています。その一方で、鉄道駅と市街地の関係は、地形的条件の制約もあって弱く、鉄道駅周辺における市街地の発達は、和知駅のある本庄地区を除いて限定的なものとなっています。

丹 波と瑞穂は国道9号で、丹波と和知は国道27号で、それぞれ互いに連絡することにより、町の中心部から北部や西部に向かう地域軸を形成していますが、瑞穂と和知の間は、比較的標高の高い山でさえぎられているため、幹線道路等が整備されていません。

近 い将来、町域を南東部から北西部にかけて貫くように京都縦貫自動車道が整備され、既設の丹波ＩＣに加え、瑞穂ＩＣ（仮称）、和知ＩＣ（仮称）が設けられることになっており、現在の京丹波町の地域構造が抜本的に再構築されます。特に、瑞穂と和知との連絡強化が期待されます。

※ＩＣ：インターチェンジ。高速道路などが普通道路に連絡する出入り口。

めざす地域構造

京丹波町がめざす地域構造は、これまで形成されてきた構造を基本としながら、次のような方向に強化・発展させることとします。

京丹波町全域で示す丹波高原ゾーンと環状軸による骨格構造の形成

地域全体を「丹波高原ゾーン」として位置づけます。

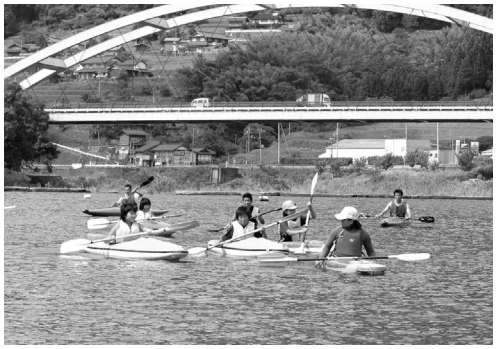
丹波高原ゾーンは、国道（9号・27号・173号）、整備が進められている京都縦貫自動車道等の幹線道路によって環状に形成される交通軸で一体的なものとなります。

環状軸上に町民サービスと都市との交流拠点となる「拠点」と「エリア」の配置

町の環状軸上に三つの地域拠点（須知・蒲生地区、桧山地区、本庄地区）が配置される形になります。これらの地域拠点のうち、須知・蒲生地区を京丹波町の地域中心拠点（核）として位置づけます。

行政、商業、保健・福祉、医療等の町民サービス機能や各種の交流機能等が数多く立地する須知・蒲生地区から桧山地区にかけての地域を、京丹波町の中心的な機能の集積を図る「丹波高原にぎわい交流エリア」として位置づけます。

北部の本庄地区を中心とし北部に広がる水、緑等の美しい自然が展開する地域を、豊かな環境の中で人と自然、人と人がふれあい交流する「水と緑のふれあい交流エリア」として位置づけます。



※ゾーン：地帯。
※エリア：区域、地域。

環状軸上に鉄道利用型のエントランスエリアの創出

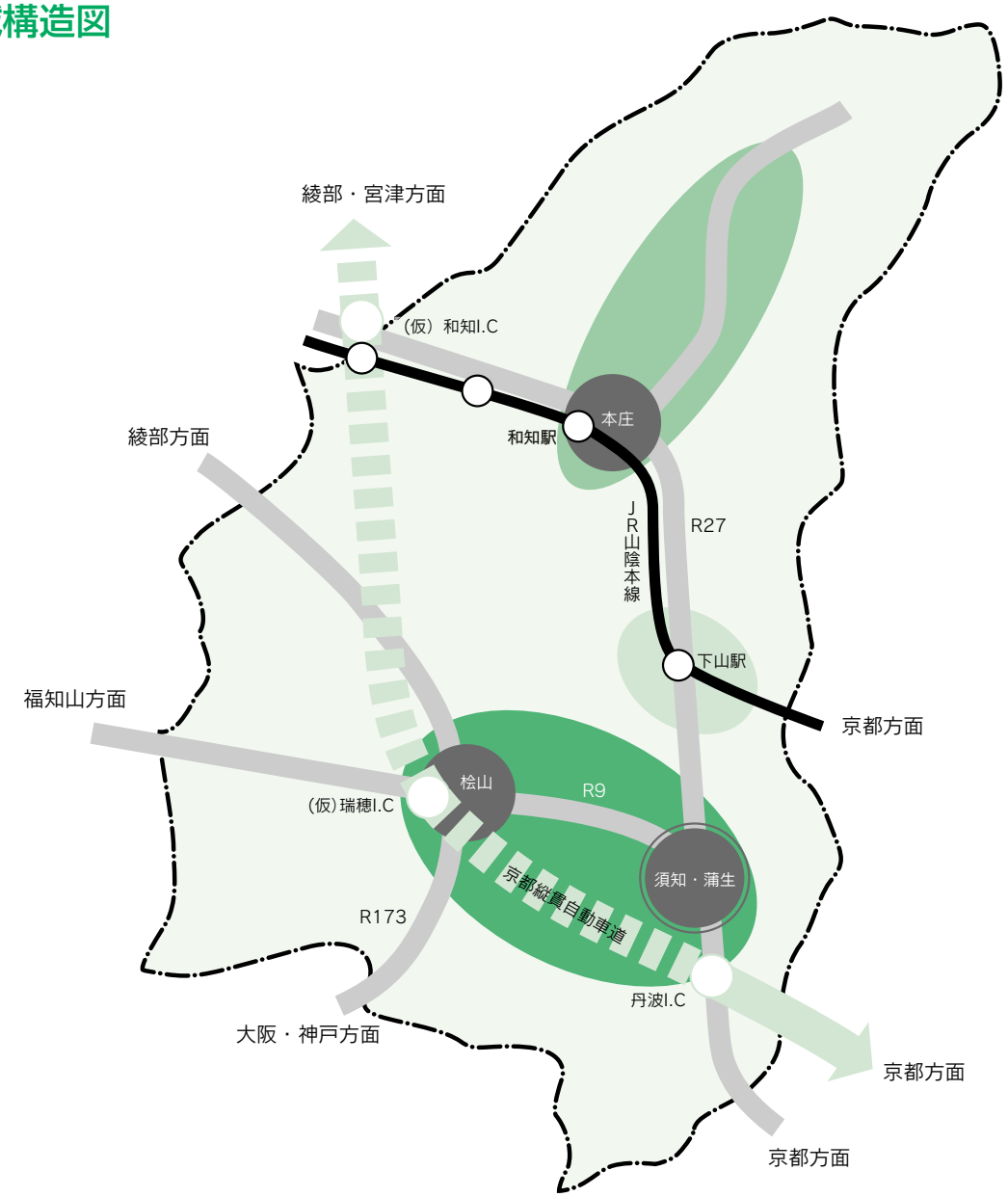
今後の京丹波町の発展を考慮すると、都市との交流活動がますます重要になります。交流活動は、従来は自動車交通による誘客だけに重点を置いて取り組んできましたが、今後は、団塊の世代を中心にして鉄道利用者も増加していくことが予想されることから、鉄道を活用した誘客戦略を展開します。

京都方面から「丹波高原文化の郷」への玄関口となる下山駅とその周辺を「丹波高原エントランスエリア」として位置づけ、丹波高原への玄関口にふさわしい地域としての整備を図ります。ただし、地形が起伏に富んでいるため、一体的な地域としての面的な展開は難しいことから、国道27号下山バイパスの沿線地域等を中心に高原地域らしい機能の充実や景観づくり、町民の健康保養対策などを進めます。

和知駅とその周辺は、鉄道利用者と自動車利用者いずれもが集うことのできる地域拠点、さらには「水と緑の交流エリア」の核としてふさわしい地域としての整備を図ります。

※エントランス：入り口、玄関。

地域構造図



	丹波高原ゾーン	緑豊かな高原と調和した多様な都市活動が展開されるゾーン
	丹波高原にぎわい交流エリア	行政、商業、医療・福祉等多様な都市機能が立地するとともに、豊かな自然環境等を生かした観光・レクリエーション等により多彩な交流が展開されるエリア
	丹波高原エントランスエリア	駅を中心に鉄道による丹波高原の玄関口としての展開を図っていくエリア
	水と緑のふれあい交流エリア	美しい自然環境の中で、人と自然、人と人がふれあう場として活用を図るゾーン
	地域拠点	住民の生活に密着した都市機能が集積する地域拠点
	地域中心拠点	町の中心的な拠点（核）
	地域内連携・交流軸	地域の生活や歴史･文化に密着した交流を促進し、各拠点との結びつきを深めつつ、町の一体性を高める道路による地域内連携･交流軸
	広域連携・交流軸	本町と周辺市町、京都、大阪などを相互に結び、多様な交流を育む広域連携･交流軸
	鉄道・駅	

第2章

主要プロジェクトの設定と方向づけ

主要プロジェクトの設定と方向づけ

暮らしの安全・安心、保健・福祉、次世代育成・教育、産業振興、若者定住、環境など各般の政策領域を進めていくことはまちづくりの大前提として踏まえながら、京丹波町が計画期間内に重点的に展開する主要プロジェクトを設定します。

このプロジェクトは、「住民が愛し誇ることができる地域づくり」や「人が訪れ滞在したくなるまちの魅力の発揮」、「自立的な地域経営の確立」などのために、いま一歩踏み込んで構想期間に集中して取り組むものを指します。

また、京丹波町として新しいまちづくりを進めるにあたって、従来、個別の三つの町であったがために、十分に活用できていなかった多彩な人材や地域資源をさまざまに工夫し結びつけて最大限に活用し、より大きな魅力を発揮していくことを企図しています。

1 プロジェクトの設定

「丹波高原文化の郷」の創造・発信

京丹波の“丹波高原文化”は、この地域固有のものとして人びとの暮らしの中に存在するあらゆる生活文化をいいます。

高原の「風土」や、丹波黒大豆、丹波大納言小豆、丹波松茸、丹波栗などの丹波ブランド産品に代表される「食」周辺には、競争力の高い文化的価値がまだまだ眠っています。

この“丹波高原文化”を発見・再発見し、高め、つなぎ、さらに磨いて、広く発信するとともに、地域所得の向上や若者が夢を持てる地域づくりへと結びつけていきます。

ぐるりと結ぶ「丹波高原文化の郷」周遊ルートの形成

国道27号下山バイパス整備と京都縦貫自動車道の延伸が完了することで、京丹波町の地域構造は樹枝状から網の目状へと一変します。

高原を周遊するルートから生まれる新風を、京丹波の“丹波高原文化”や町民の一体感の醸成へとつなげていきます。

人がつながり、丹波高原にひろがる元気なまちづくり

京丹波の“丹波高原文化”は、町民の生活文化そのものです。この地に暮らす人びとが健康でいきいきと、たくさんのふれあいを楽しむことの中でこそ、その文化は花開きます。

人づくりを基本に据え、「京丹波町のことは私たちがいちばん知っている」「まちづくりの主役は私たちだ」といえる町民が一人でも多くなるよう、また、だれでもそれぞれの立場で気軽にまちづくりに参画できるよう、町民等の交流・連携を活発化させ、町の一体感を醸成していきます。

2 プロジェクト別方向づけ

「丹波高原文化の郷」の創造・発信

京丹波町には、丹波ブランドに代表されるように、古くからの京の都との強い結びつきの中で培われ、京の生活文化・食文化と密接に結びついた、実体と歴史のある“丹波高原文化”が息づいています。これを内外に「丹波高原文化の郷」として発信していくため、次のような取組みを行います。

丹波高原四季の顔づくり

「丹波高原文化」のPR

四季折々の丹波高原の魅力を「食」「歳時」「暮らし」など多面的に抽出し、内外に向けて徹底して打ち出すとともに、各種ツールを活用してＰＲ活動を展開します。また、その中で、特に優れたものを「丹波高原文化の郷100選」等として選定するなど、内外に向けてアピールします。

高原らしさを醸し出す景観づくり

「丹波高原文化の郷」にふさわしい景観づくりを進めていくため、「景観ガイドライン」等を策定し、町民、団体、民間事業者等と行政との協働による取組みを推進します。特に幹線道路や鉄道沿線、バス停、川沿いなどを重点的に修景します。

国道9号、27号、173号等の主要幹線道路をシンボルストリート化するため、高原らしさを演出する景観づくりに向けて関係機関に働きかけます。

※景観ガイドライン：良好な景観づくりを目的として、めざすべき目標や一定のルール・マナーなどを定めたもの。

丹波高原都市づくり

丹波高原都市の中心市街地づくり

京丹波町の地域中心拠点（核）となる須知・蒲生地区において、中心市街地としての整備を検討します。

玄関口エリアの形成

道路を利用して来訪する人びとに対して、京阪神、府北部、山陰方面との道路交通の結節点という好条件を生かし、京都縦貫自動車道ＩＣ、各道の駅などを道路交通による丹波高原の玄関口として位置づけ、産業・交流活動等を推進します。

鉄道を利用して来訪する人びとに対して、ＪＲ駅を生かし、下山駅周辺地区及び和知駅周辺地区について、鉄道による丹波高原の玄関口としてふさわしい環境づくりを推進します。

地域産業の発展と美しい国土づくり

農林業後継者の育成や多様な担い手の確保、組織の育成などにより、農林業経営の発展をめざすとともに、農地や森林の荒廃を防止し、これらの持つ多面的機能を維持して、次代へ引き継ぐ美しい国土づくりに努めます。

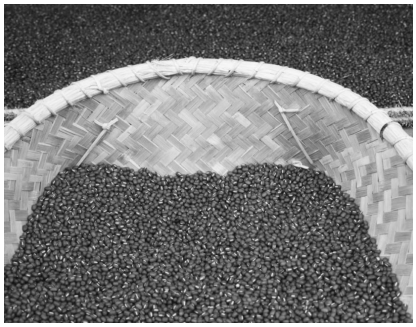
※多面的機能：（森林や農地が持つ）国土の保全、自然環境の保全・良好な景観形成、水源かん養・洪水防止、水質浄化、二酸化炭素吸収、余暇・レクリエーションの場などの多様な機能のこと。公益的機能とも呼ばれる。

丹波高原食文化の第6次産業化

地域特産物等の生産の維持・発展、拡大

わが国の産物を代表する丹波黒大豆、丹波大納言小豆、丹波松茸、丹波栗等をはじめとする地域特産物の生産を維持・発展させます。

ソバ等の新たな地域特産物の企画・開発を行い、販売経路の拡大と連携させながら生産拡大を図ります。



農林産物加工特産品の企画・開発

地域農林産物を活用した加工品の企画開発を積極的に推進し、特産加工品の種類の豊富化と水準の向上を図ります。

特産加工品の企画・開発に取り組む起業の育成を促進するとともに、誘導・支援を図ります。

特産加工品づくりについて、重要な役割を果たす女性の組織的な取組み等の促進・支援を図ります。

販売経路の拡大と戦略的販売の促進

市場出荷に加えて、産地直売、通信販売、インターネット販売等の多様な販売経路を開拓し、戦略的な販売活動を展開します。

※第6次産業：農林作物等の生産（第1次）だけでなく、加工（第2次）、販売（第3次）までを一体的に取り組む新たな産業形態を例えたもの。「第1次産業×第2次産業×第3次産業＝第6次産業」の算式を由来としている。

※インターネット：世界中の政府組織、企業、学校、個人などのコンピュータネットワークを相互接続させた大規模なネットワーク。一般利用者は、専用線や電話回線等で接続し、情報の検索や閲覧、電子メールの送受信などができる。

生産～加工～流通・販売の連携強化による「京丹波高原ブランド」の創出

生産から販売に至る一連の活動を連携させ、安全・安心・こだわりの食材、良質の木材、農林産物加工品等を「京丹波高原ブランド」として打ち出し、市場開拓・市場拡大を積極的に推進します。

「京丹波高原ブランド」づくり推進体制の整備

「京丹波高原ブランド」の生産から加工・販売に至る各過程の推進者について、後継者や組織の育成を図ります。

新たにチャレンジする推進者を町外からも求め、受け入れ態勢を整えながら、強力な推進体制づくりに努めます。

丹波高原文化づくり

伝統的な祭りや行催事・伝統芸能等の保全・継承

人びとの暮らしや風土の中で育まれてきた伝統的な祭りや行催事、伝統芸能等地域固有の文化の保全を図るとともに、次代へ継承する取組みを推進します。

新しい「丹波高原文化」の創出

町民の文化芸術活動の活発化と交流機会の拡充等により、文化の香り高いまちづくりを進めます。

町内外の人びとの交流を深めていく中で、新しい「丹波高原文化」づくりを意識的・積極的に推進します。

ぐるりと結ぶ「丹波高原文化の郷」周遊ルートの形成

合併し京丹波町となったことで、旧3町それぞれではつくり出せなかった“丹波高原文化”を大きく打ち出すことができるようになりました。

そのような中で、町内を周回できるルートの整備は、町民の生活利便性と町の一体感の醸成、また、観光面でも重要な位置を占めています。

そこで、現在進められている国道27号下山バイパスの早期完成、また、京都縦貫自動車道の延伸についての働きかけを強めるとともに、これら全体として「丹波高原文化の郷」周遊ルートとしての位置づけを行い、ネットワーク化を推進します。

丹波高原周遊ルートづくり

「丹波高原文化の郷」のネットワーク化（観光ネットワークの整備）に合わせて、安全かつ快適に移動できるよう道路等の整備を推進します。

町内周遊ルートの形成

町民の重要な交通手段でもあるバス交通の充実と運行の効率化を図るとともに、季節ごとに旬の観光体験スポットをつなぐなど、周遊コースの整備を検討します。

「丹波高原文化の郷」周遊ルートの一体的な景観づくり

景観ガイドライン等を踏まえ、「丹波高原文化の郷」周遊ルートとしての位置づけを重視した一体的な景観形成等を促進するとともに、国や府に対しても協力を働きかけます。

丹波高原地域幹線ルートづくり

国道27号下山バイパスの整備促進と沿道地域の活用

国道27号下山バイパスの早期完成に向けて国への働きかけを行います。また、沿道の工業適地等において、“丹波高原文化”を支える地場産業の育成や立ち寄りスポットの整備等を図ります。

京都縦貫自動車道の延伸促進とＩＣ周辺の地域づくり

京丹波町では、京都縦貫自動車道が丹波ＩＣで途切れていることから、通過交通が京丹波町に立ち寄るという好条件にありますが、延伸によってこの条件が失われることが危惧（ぐ）されます。延伸に伴ってインターチェンジ周辺の地域づくりを進める中で、京丹波町の玄関口としての役割の強調や、京丹波町内三つのインターチェンジの有効な活用による連携の強化をめざします。

※通過交通：区域内に出発地・目的地を持たない、通過する自動車等の交通のこと。

人がつながり、丹波高原にひろがる元気なまちづくり

だれもが京丹波町に誇りと愛着を感じ、町政や地域づくりにかかわりを持ちながら、町民としての一体感を意識しながら生活ができる地域づくりを進めます。そして、町民が自ら自信と誇りを持って健康で心豊かに生活できるよう、人材の育成をはじめ、コミュニケーション基盤の充実と町民のふれあい・参加・協働の機会拡充を図ります。

企画・マネジメント組織づくり

企画・マネジメントに携わるチームの編成

「丹波高原文化の郷」づくりを総合的にプロデュースするチームを、町内外の人材により編成します。同チームは、協働の取組みを促しながら、地域経営の視点から各般の取組みを巻き起こす要としての役割を果たす組織として位置づけます。

協働のまちづくりの展開

町民の自治意識の高揚と一体感の確保を図り、主体的にまちづくりに取り組む組織（住民自治組織等）をはじめ、ＮＰＯ、ボランティア活動等の団体、民間事業者等と行政の協働によるまちづくりを展開します。

また、町民が自らのまちを知り、愛し、誇りを持って気軽にまちづくりに参画できる環境をつくります。

次代を担う人づくり

次代を担う青少年が郷土（京丹波町）を愛し、それぞれの個性を発揮しながら京丹波町の担い手として健全に育つよう、家庭・地域・学校、関係機関が一体となって子育ち・子育てを支え、家庭教育、学校教育、社会教育などのあらゆる機会において、教育の充実を図ります。

※NPO：Non-Profit Organizationの略語で、直訳すると非営利団体となる。政府・自治体・私企業とは独立した存在として、民間や住民の手によって構成された、利益を追求することを主目的としない社会貢献や慈善活動を行う活動組織のこと。

※ボランティア：自発的な意志により社会的な奉仕活動をすること。一般的には無報酬での活動を指す。
※子育ち：子どもが心身共に成長する力を自ら持っていることを指す。また、地域全体で支えるという視点を重視した言葉でもある。

情報ネットワークづくり

情報ネットワークの整備による町の一体化

ケーブルテレビ施設を町全域に拡張し情報施設の一元化を図ることにより、町民が主役のまちづくりのためのコミュニティの育成と、効率的で効果的なまちづくりを展開します。

情報共有によるまちづくりの推進

ケーブルテレビ、インターネット、広報紙等の特長を生かし、議会や行政情報をはじめさまざまな情報を共有することを通じて、町民意識のまとまりを高めます。そして、町民、団体、民間事業者等と行政が一体となって取り組むまちづくりを進めます。

定住環境づくり

水資源開発による安定的な定住基盤の確立

将来にわたり安全で安定した水資源の確保に向けて、畑川ダムの建設促進と水道統合整備の推進により、未給水住宅団地等への給水による安定的な定住基盤の確立を図ります。

就業環境の強化

定住のための基本的な条件として働く場の確保を重要なものとして位置づけ、「第6次産業化」による地域産業の抜本的な強化を図るとともに、就労機会の拡充に努めます。

京丹波町がめざす「丹波高原文化の郷」にふさわしい企業の誘致に戦略的に取り組みます。

定住のための受け入れ態勢づくり

町内で就業の機会を求める若者、町外から週末居住や定年後居住等を志向し、UJIターンによる定住の地を求める人びとがあります。

こうした中で、大都市に近い環境豊かな地域としての特徴を生かし、地域の若者や新たに定住の意志のある人びとにとって、さらに魅力的なまちとなることをめざした住宅整備、受け入れ態勢づくりを進めます。

※ケーブルテレビ：有線テレビジョン放送施設。自主制作番組のほか、地上放送や衛星放送の再送信を行う情報施設をいう。テレビ放送の多チャンネルのほか、双方向通信機能を使った電話、音声告知、インターネット接続サービスなどが普及している。

健康・福祉のまちの確立

町民一人ひとりが互いの人権を尊重し、支え合い、健康で生きがいの持てる生活を送ることができるよう、町民の健康づくりと地域の福祉力を強化し、健康・福祉のまちの確立を図ります。

安心・安全な暮らしの確保

防災体制の充実、防災意識の高揚などにより災害に強いまちづくりを進めるとともに、地域ぐるみで犯罪、事故等に遭わない取組みを推進し、町民の安心・安全な暮らしを確保します。

第3章

基本構想の実現に向けて

基本構想の実現に向けて

1　町民、団体、民間事業者等と行政との協働によるまちづくりの推進

京丹波町のこれからのまちづくりは、町民、団体、民間事業者等と行政との協働を基本とします。

町や地域が抱える共通の目標や課題に対し、町民、団体、民間事業者等と行政などが相互理解と信頼を前提とし、対等な関係に基づき、共に考え互いに協力し合って実践していきます。

2　地域マネジメント組織による実践

総合計画を推進するにあたって、主要プロジェクトに掲げた体制「総合的にプロデュースするチーム」が担い果たすべき役割は非常に重要です。町（庁）内外の知恵と経験を集めて、段階ごとのねらいを明確にした取組みを進めます。

3　効率的な行財政運営と協働による地域経営

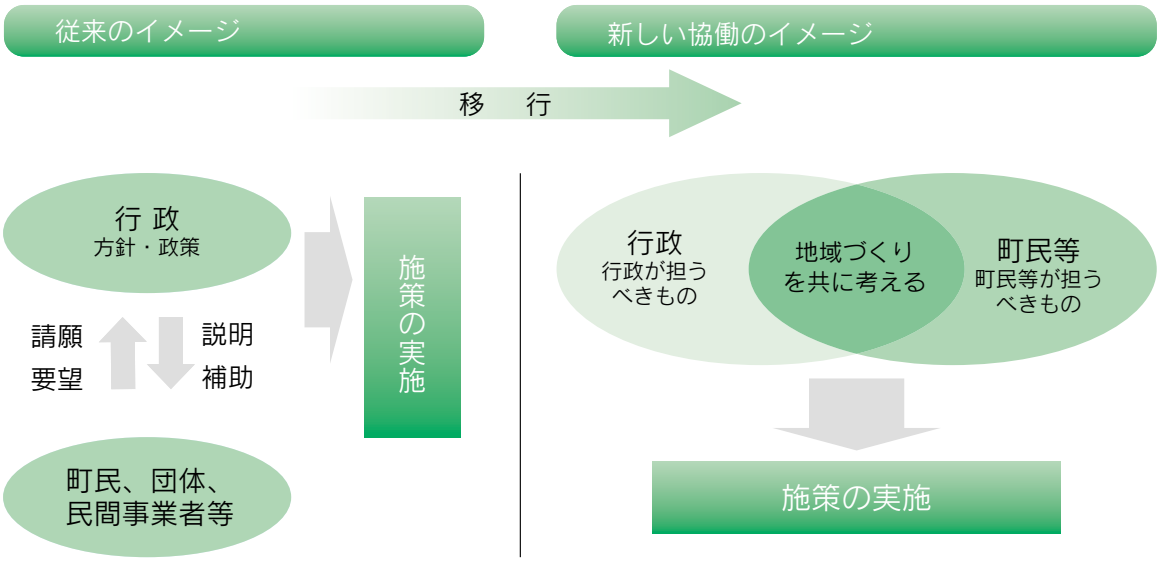
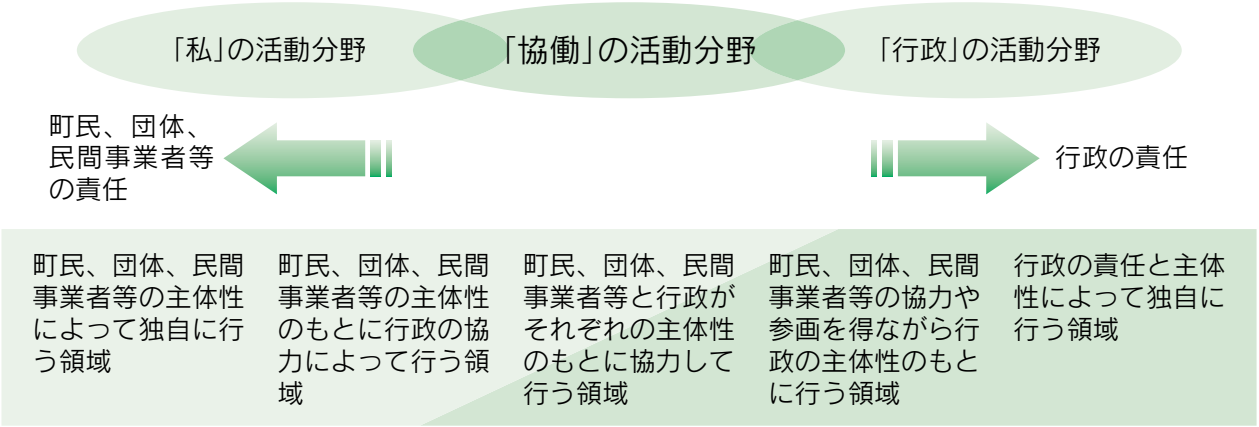
総合計画に基づく施策を計画的に推進するため、行財政改革の徹底と町職員の資質の向上を基本とし、評価と継続的な見直しを重視したＣＡＰＤサイクル（「Check／評価」→「Action／改善」→「Plan／計画」→「Do／実行」）を導入した効率的な行財政運営、さらには協働による地域経営をめざします。

特に主要プロジェクトは、今後の京丹波町の特色づくりに寄与するとともに、地域経済力を高め町民生活を豊かにする上で先導的な役割を果たすものであることから、それにかかわる施策の実現に特別の配慮を行います。

なお、施策の推進にあたっては、町民、団体、民間事業者等との協働を重視することから、これに向けた体制を整えていきます。あわせて、町職員のまちづくりへの参画を促進します。

※CAPDサイクル：Check（評価）、Action（改善）、Plan（計画）、Do（実行）の頭文字を並べたもので、「評価→改善→計画→実行」という過程を用いて、次の施策、事業等に生かすといった継続的な活動をいう。民間企業の経営活動では、ＰＤＣＡサイクルが一般的。

町民等と行政との協働のイメージ



町民等と行政との役割分担